

留学生別科 第1回春合宿報告

古川竜治

1. はじめに

本報告は留学生別科教員全体で取り組んだ活動であり、筆者は教員を代表してここに報告するものであることを最初に述べておく。

2010年4月、留学生別科では本科の新入生合宿に合わせて、初めて別科独自の春合宿を実施した。本科においては2007年度より新入生春合宿が実施されており、留学生別科も2007年度には鈴鹿サーキットにおいて実施された本科合宿に参加した経緯がある。しかしながら本学に入学したばかりの別科生は、全員が来日したばかりで日本語がおぼつかないこともあり、本科に歩調を合わせて合宿プログラムを進めていくには難しい点もあった。それゆえそれ以後は、従来どおり学内でのオリエンテーションのみで新入生教育を進めてきた。

しかしながら、入学当初に短い時間ながらも友人や教員と寝食を共にすることは、入学したばかりの新入生が大学を理解し、友人を作り、教員とも親睦を深めるという点において非常に有益で価値のあることである。特に来日数日しかたっておらず、本学どころか日本の生活そのものについても経験のない留学生にそのような機会を与えることは、その後の彼らの留学生活に大きな助けになるであろうと期待された。そこで2009年秋より留学生別科内での協議をおこない、今年度はじめて独自に別科合宿を行う計画を立案した。合宿の形式は、日本の小中学校等でよくおこなわれる「少年自然の家」を利用した“共同生活”である。共同生活の中で、仲間や教員と親睦を深めつつ、日本的な集団生活が経験でき、今後の日本語学習にも役立つオリジナルのプログラムを組んだ。ただ、その実施には少なからぬ不安を感じていた。なぜなら対象者は日本をまだ理解していない外国の若者であり、日本人よりも“個人主義”だと言われることもあるからである。日本式の“合宿”というものを理解し、みんなで“協力・協調”してプログラムを進めていけるかどうか未知数であった。そもそも日本流の“合宿”は、少なくとも本学の留学生の大多数をしめる中国人は母国でも経験がない。時間に厳しく、全員の“規律”と“協調性”が求められる日本流の集団生活を、はたして学生は理解してくれるのか、計画された各種プログラムは順調に進められるのか、食事（配膳）係、掃除係などという組織の中での役割分担を理解し、そのうえで担当者はみんなのために自主的に動いてくれるのか…など様々な不安が脳裏をかすめた。

しかしながら結果として、この不安はすべて杞憂にすぎないものであった。今回別科生たちは

我々教員が予想していた以上にすばらしい“協調性”をみせ、仲間同士で“一致団結”して目標達成に尽力し、仲間のためにすすんで“奉仕”し、たった1泊2日という短い時間ではあったが、すべてのプログラムを無事にやり遂げた。前日の緊張と不安の面持ちが垣間見えた入所式とは違い、退所式に臨んだ際に見せてくれた学生の明るい表情と背筋をすっと伸ばした姿は、自信と満足感に満ちているように見えた。その学生の充実した笑顔は、学生自身のみならず、我々教員側が当初予想していた成果以上のものを学生が得たのではないかと感じさせるものだった。そしてたった1日半でこれほどまでに学生たちの雰囲気が変わったことに私も驚いた。

この報告は、今回の合宿について学生におこなったアンケート調査の結果をもとにまとめたものである。

2. 実施計画

今回の別科春合宿の計画及びその目標は、本年度の本科春合宿実施の趣旨にもとづいてたてられた。

【目的】

本学の建学の精神「技術者たる前によき人間たれ」の人間性重視の教育に基づき、希望に満ちた大学生活を送るうえで必要な集団生活における規律、望ましい共同生活のできる態度の育成、および自分らしい生き方「本当の自分の生活を考える」について、自分の目で確かめ前向きに生きる心の育成を目的とする。

【狙い】

学生と教員（担任）との距離を縮め、クラス内の交流を深めると共に自分の周囲への気配りができるよう、また挨拶・身だしなみ・言葉遣い・美化・喫煙マナー等について大いに話し合い、大学生活の中で人間性を身につけ、「明るく元気で礼儀正しい」学生の育成を目指す。学習面では、授業に集中する学習習慣を身につけさせて、学力的に多様化した学生一人一人の学力の向上を目指し基本的事項を定着させる。

この中にもあるように、特に「集団生活における規律や望ましい共同生活ができる」、「クラス内の交流を深めると共に自分の周囲への気配りができる」、「挨拶・身だしなみ・言葉遣い・美化・喫煙マナー等について話し合う」等生活面から、「授業に集中する学習習慣を身につけさせる」という学習面にわたる目標まで、今後の留学生活に必要なと思われる内容を目標としてまとめた。

2010年 4月8日（木）、9日（金）〔1泊2日〕

■
[各務原市少年自然の家] (各務原市鵜沼)

※実施場所の選定条件は、必要経費が安いことと、なるべく学校から近いところという点。

■
別科生33名、別科教員 (引率・指導) 7名 合計40名

学生：〔中国人32名、タイ人1名〕〔男子：28名、女子：5名〕

教員：〔男性：4名、女性：3名〕

※今年度春学期新入生が6名と少なかったこともあるが、学生同士、学生と教員とのコミュニケーションを深めることを主眼に、参加対象者は新入生のみにとどめず別科在籍生全員とした。また、教員は別科専任教員のほかに、クラス担任をお願いしている2名の非常勤講師の先生方にも参加、協力をいただいた。

【費用】

3,290円/人

※施設利用費、食費 (3食+夜食)、リネン費、施設内活動費等、合宿費用すべてを含む。別途JIバスによる学校と施設往復の交通費。

3. 活動内容

次頁の《スケジュール表》にもあるように、今回の合宿での主な活動は以下のとおりである。なお本報告書に出てくる円グラフは、最後の頁に掲載した【資料】の「アンケート調査票」結果を集計したものである (グラフ上のタイトル番号もアンケート調査表に準拠する)。

【第1日目：午前】

- 1) 工作活動…小枝を柄に使った自分だけのスプーンを制作し、もの作りの楽しさを味わう
(二日目の野外炊事で各自実際に使用)

【第1日目：午後】

- 2) 日本語活動①…『紙芝居』を聞く(別科教員による日本の『紙芝居』の実演を鑑賞)
- 3) 日本語活動②…『紙芝居』の練習(グループに分かれて、紙芝居実演の練習)
- 4) カルタ取り…ゲーム性をとり入れた日本語活動(グループ対抗戦で景品も用意、息抜きのゲーム)

【第1日目：夜】

- 5) 日本語活動③…『紙芝居』の発表(グループごとによる『紙芝居』の実演)
-

【第2日目：午前】

- 6) 伊木山フィールドワーク…隣接する伊木山を駆けめぐるオリエンテーリングゲーム
(グループ間におけるポイント数の競争)
- 7) 野外炊事…野外での飯盒炊さん(カレーライスづくり)

古川竜治：留学生別科 第1回春合宿報告

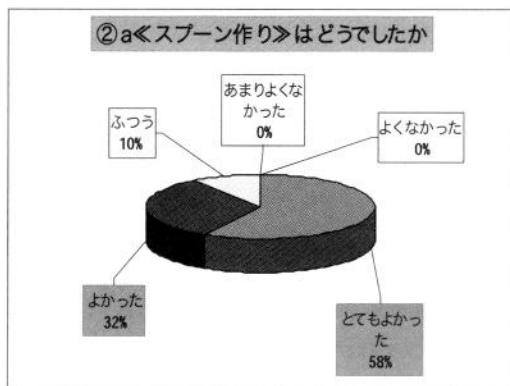
《スケジュール表》(各務原市少年自然の家のフォームにもとづく)

第1日目 4月8日 木曜日		第2日目 4月9日 金曜日	
9:20 体育館前に集合 (バス乗車次第出発)		6:00 起床・洗面・自室清掃	
		6:40 朝のつどい (集会室)	
		7:00 朝の清掃 (食事係は食堂で配膳をする)	
		7:25 朝食 (事後に食堂の清掃をする)	
10:00 入所式 司会：学校 オリエンテーション	《場所》 集会室	8:30 伊木山フィールドワーク	《場所》 伊木山
10:30 小枝のスプーン	クラフト室	11:30 野外炊事 (カレー&フルーツ)	野外炊事場
クラフト終了後、食事係は食堂に 集合する		(雨天) ファイブゲーム・室内オリエン テーリング	集会室・館内
昼 食 (12時 00分～13時 00分)			
13:00 日本語活動①《紙芝居を 聞く》	《場所》 研修室	14:30 奉仕活動	《場所》 集会室
14:30 日本語活動②《紙芝居を やってみる・練習》		15:00 部屋点検	
15:30 カルタ取り大会		15:30 退所式 司会：学校	
16:00 入室、シーツ配布 ベッドメイキング		15:45 正面玄関前集合 バス乗車次第出発	
		16:00 学校着 解散	
ベッドメイキング終了後、食事係は食堂に集合する		【備考】 適宜通訳を配置。 班の編成＝①部屋割り (4班) 責任者：古川 ②初日の活動 (6班) 責任者：清水勝 ③2日目の活動 (5班) 責任者：古川 ※各班ごとの名簿は別途参照	
夕べのつどい (食堂)			
夕 食 (17時 25分～18時 30分)			
18:30 日本語活動③《紙芝居を やってみる・発表》	《場所》 和室研修室		
(9日の各組の係を決める)		8日 20:00～会館担当者と引率教員の打ち合わせ	
入 浴 (20時 00分～21時 00分)			
反省・連絡 就寝・準備 22:00 消 灯			

■活動内容詳細

〔工作活動〕

第1日目入所後すぐに所内のクラフト室において、工作活動をおこなった。内容は小枝を使った自分だけの“マイスプーン”作り。この施設ではこのほかにもいろいろな工作ができるが、まずは「もの作り」の楽しさを味わってもらい合宿のスタートを切ろうということでこの活動を選択した。作業はいたって簡単であり、スプーンの柄となる小枝に彫刻刀で細工を施し、そのうち小枝に開けられた穴にスプーンの先を差し込みボンドで固定、最後に柄にニス塗って半日乾燥して出来上がりである。ただ、作業を始めたところで学生たちがこれまで一度も彫刻刀を使ったことがないことが判明。中国では日本の小学校でおこなう図工のような授業はないそうである。最初は「なんでスプーンなんか作るの?」といった雰囲気であったが、作り始めてからは、みな一心不乱に“自分だけのデザイン”づくりにふけていた。できあがった作品はかなり手の込んだ自信作から、実用には不向きとしか思えない形の柄（小枝）まで、個性あふれるスプーンがズラリと並んだ。なお、これらのスプーンは2日目の野外炊事で実際に学生たちに使用させた。アンケート調査では、90%の学生が「よかった」と回答している。



〔日本語活動①②③（紙芝居）〕

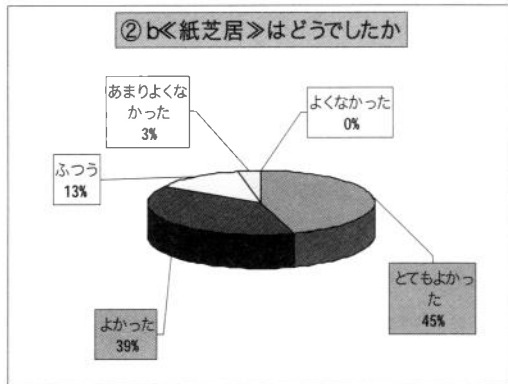
今回の合宿における活動の柱の一つが、この『紙芝居』実演である。計画時にはさまざまな日本語活動の案がでたが、ただ受身的に勉強させたり覚えさせるのではなく、積極的に日本語を使わせること、そのための準備段階において仲間と協力し合い、最後に一つの「作品」を完成させてみんなの前で発表させることをテーマに、『紙芝居』という方法を選択した。

活動方法としては、事前に別科で用意した『カチカチ山』や『鶴の恩返し』など代表的な昔話の紙芝居を数作品、まずは学生たちの前で、別科教員が「たぬき」や「おばあさん」などになりきって迫真の演技を披露し、学生たちに『紙芝居』の何たるかを理解してもらった。日本語そのものはけっこう難しくて聞き取れなくても、みな初めてみる『紙芝居』に興味津々であった。教

員による実演が終わったところで、6名程度でグループを作り（事前に教員側でグループ分け）、その中に教員1名が指導役に入り、その場で彼らに好きな作品を選ばせて配役も決めさせ、1時間ほど練習をおこなった。その後夕食をはさんで、夜には和室でみな車座になり、全グループがほかの学生の前で練習の成果を披露した。日本語そのものはまだまだたどたどしくても、みんなの前で真剣に“演技”する彼らの姿に、我々教員もおもわず大きな拍手を送ったものである。

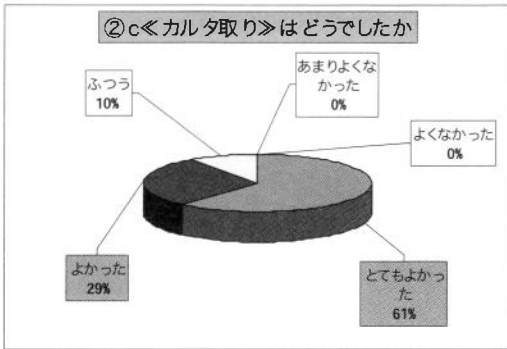
実はこの活動は、本当にうまくいくのだろうかと一番心配していたものである。『紙芝居』実演を子供のお遊びにとらえ、学生たちが白けていい加減にとりつくろって終わり、となることを恐れていた。だが、実際にはどのグループも熱心さが伝わってきたし、中には30分にもわたる長いストーリーを演じきるグループもあったりして、予定を大幅に超えながらも、演じる側、聞く側ともに一つの輪となって過ごした時間であった。

この活動を通じて、学生がチームワークで一つの目標に熱心に取り組む姿が強く印象に残った。ただ、練習段階においては、学生任せのところも多かったため、今後は教員側でもう少し日本語の指導を行う、練習のポイントを明確に提示する、全体の流れも把握していく等、こまめな対応も必要ではないかと感じた。アンケート調査では、84%の学生が「よかった」と回答している。



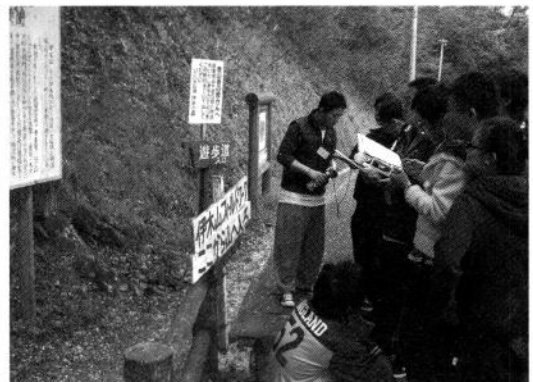
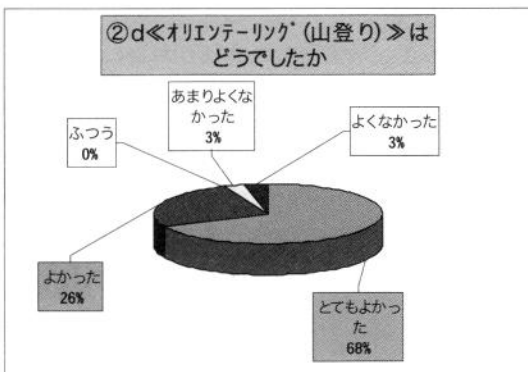
カルタ取り

これまでの日常の授業において、ゲーム性を取り入れると、学生たちの真剣さが目に見えて高まることをいくどとなく経験したが、この「カルタ取り」もそれを狙ったものである。札の読み手と取り手、ともに学生にまかせ、まずはチーム内で競わせ、その中の勝者がこんどはグループを代表して他グループと競り合い、最終的に勝ったチームに文具などの景品を進呈という、いやがおうにも盛り上がる内容であった。普段の授業もこれぐらい盛り上がればさぞ楽しいであろう。ただ、集中度は一過性でその場限りで終わってしまう内容でもあり、継続性ということを考慮した時、もう少しほかの活動も考えられるかと思われた。アンケート調査では、90%の学生が「よかった」と回答している。



伊木山フィールドワーク

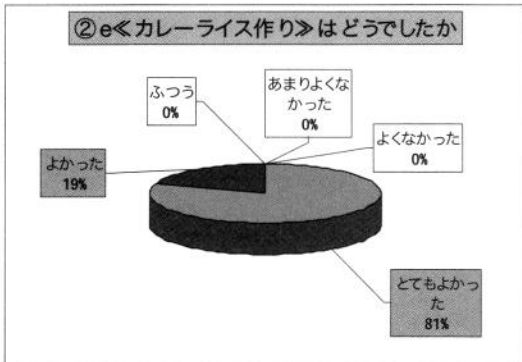
野山を駆け巡る「野外オリエンテーリング」である。合宿施設自体が伊木山のふもとにあり、オリエンテーリングコースが山中に張り巡らされている。ここでもグループ競技とし、決められた時間内にできるだけ多くのポイントをまわり、そこにある問題を解いてその点数を競うものである。1グループ7名程度であるが、山に入るといふこともあり安全のために教員1名が参加し順次スタート。この活動にも勝者には景品が用意してあったためか、グループによっては最初から猛ダッシュで飛び出すところもあり、結果としてグループがばらばらとなり、安全のために同行していた教員が振り落とされてしまったところもあったのは、最初の規定を詳細に決めておかなかったことによる失敗であった。安全面から考えても反省と今後の改善を要する点である。しかし、遅れがちな教員をしっかりとフォローし、ゴールまで全員でまとまって行動したグループもあり、全体としては学生の評価が非常に高かった活動であった。アンケート調査でも、友達との交流やチームワーク、協力しながらみんなで問題を解くということのおもしろさや大切さを学んだなど、学生の反応が一番よかった活動であった。我々教員側もこの活動がここまで学生に受けがいいとは思っていなかった。その理由はいくつかあるだろうが、一つには自然の中で仲間と一緒にからだを思いっきり動かすというあたりにもありそうである。アンケート調査では、94%



の学生が「よかった」と回答している。

野外炊事

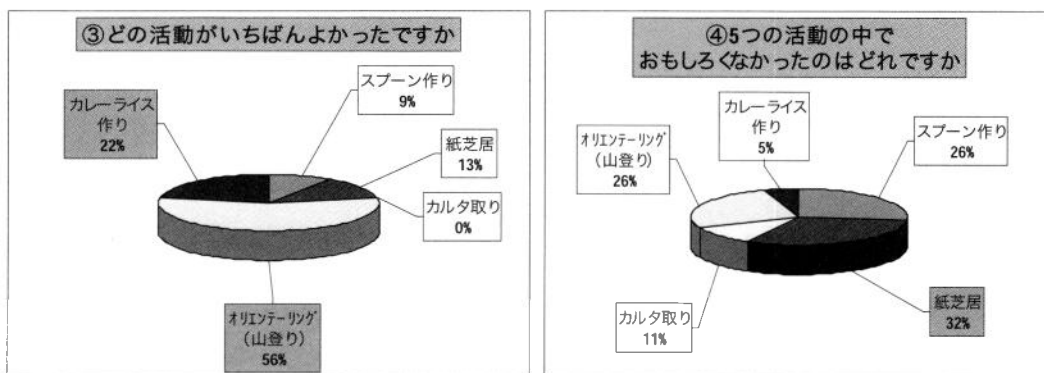
上記のオリエンテーリングに次いで、学生からの評価が良かった活動で、やはり“食べる”ことには関心度も高いようである。この野外炊事は、小中学校のこの種の合宿などではよくある、かまどを使った野外におけるカレーライス作りである。母国では食事など作ったことのない学生も、日本へ来てからは必要に迫られ、それなりに食事を作っているようであるが、さすがに野外で、それも自分で火を起こして米を炊き、カレーを作るというのはみな初体験である。ここでもグループに分かれ、火起こし係、米炊き係、カレー係等にわかれ、分業し協力して“昼食を作る”という目標にむけてがんばった。地面に穴を掘りかまどをつくって火を焚きつけることなど、みな初めてであったろうが、施設の指導員の指示を受けながら上手に火をおこしていた。そしてどのグループもそれほど失敗もなく、みなおいしそうなカレーライスを完成させたのは少々驚きであった。また、普段の授業ではあまり笑顔を見せない学生たちも、自分たちで作ったカレーライスを、前日自分で作ったスプーンでうれしそうに食べている姿は印象的であった。さらにその後の後片付けにおいても、指導員の厳しいチェックでなかなかOKがでずに最後まで必死になっとなべを洗う姿に、彼らの一生懸命さがにじみでていた。アンケート調査では、全員が「よかった」と回答しているくらい好評であった。



■「活動」全体についての総評

今回5つの活動を盛り込んだ合宿であったが、全体を通してどれがいちばんよかったか、またはよくなかったかをアンケート調査の結果にもとづいてみると、「よかった」というものについては、「仲間と共同しておこなう活動」の満足度が高いという傾向が出た。中でも【伊木山フィールドワーク】は、半数以上の参加者が一番よかったと答えている。次には【野外炊事】があがっている。またよくなかったものについては、【紙芝居】が一番多く、次に【伊木山フィール

ドワーク】、【スプーン作り】が同等で多かったが、そもそもこの問題に回答した数は全員で20名に満たず（そのほかは無回答）、一番多かった【紙芝居】でも、参加者33名のうち6名がよくなかったと回答しているのみであった。また【伊木山フィールドワーク】がよくなかった理由を見ても「疲れたから」という意見があった。



今後の検討課題としては、学生たちの満足度をさらにあげるためにも、全体の活動内容の相互調整とともに、それぞれの活動の達成目標をより明確に設定しつつ、「仲間と協力する」「体を動かす」「自立性・自主性を重視する」といったキーワードをもとに考えていくことではないかと考えている。

《アンケート調査》（自由記述より）

③どの活動が一番おもしろかったですか

【伊木山フィールドワーク】

- ・友達と一緒に協力して問題を解くのがおもしろかった。
- ・友達や先生と交流を深められた。
- ・みんなと協力するということが学べた。
- ・この活動を通じて、みんなで一致団結することができた。
- ・みんなと協力するということが学べたし、問題を探して答えることで日本語の勉強にもなって多くの知識も学べた。
- ・チームワークを鍛えられた。また友達との友情も育めた。
- ・友達と一緒に遊べた。体を鍛えられた。
- ・クラスメートと交流でき、また体にもいい。
- ・友達と一緒に協力できた。
- ・とてもおもしろかった。

【野外炊事】

- ・みんなと一緒に作ったのでとてもおもしろかった。
- ・自分で作って食べたことがとてもよかった。楽しかった。
- ・みんなと一緒に料理を作るとき楽しかったし、おいしかった。

【紙芝居】

- ・おもしろかった。
- ・楽しかった。
- ・日本の紙芝居はおもしろかった。

【スプーン作り】

- ・とてもおもしろかった。

④5つの活動でおもしろくなかったのはどれですか

【伊木山フィールドワーク】

- ・おもしろかったが、とても疲れた…。
- ・疲れた。

【カルタ取り】

- ・カルタが少なかった。

【紙芝居】

- ・おもしろくなかったものを強いてあげれば、紙芝居かな…。

【スプーン作り】

- ・簡単だった。
- ・子供がやることみたい。

【その他意見】

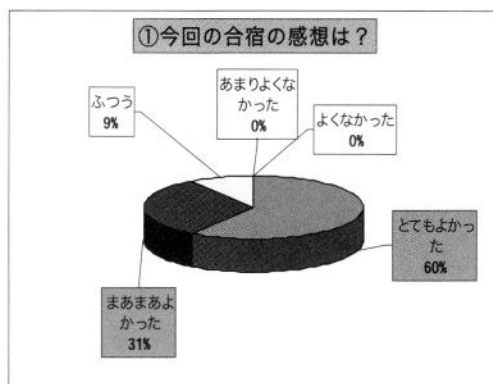
- ・みんなでスポーツがしたい。
- ・どれもみんなおもしろかった。(8名)

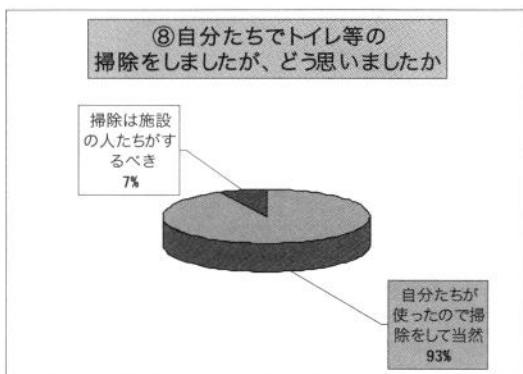
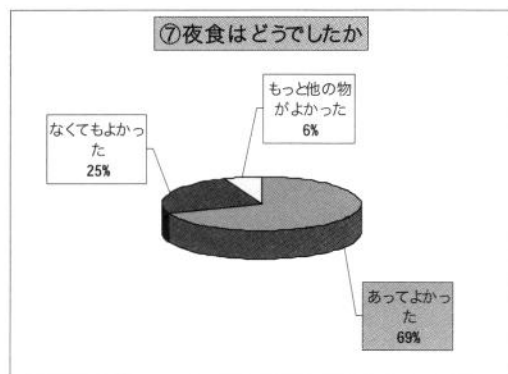
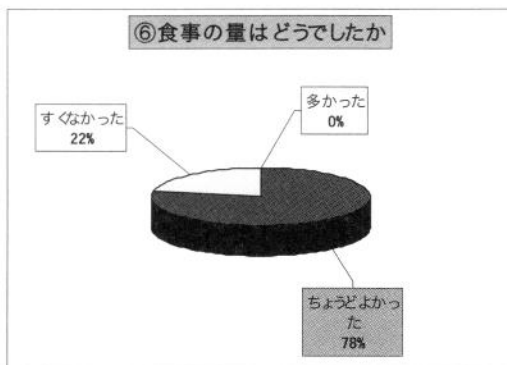
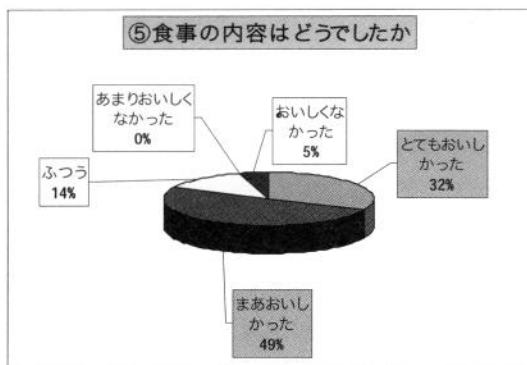


■「生活」全体についての総評

今回の合宿においておこなわれたそれぞれの活動についての様子や感想、学生側の評価は以上のとおりであるが、今回は共同生活スタイルということもあり、その他施設内における生活も、学生たち自身でおこなうものが少なくなかった。例えば、朝昼晩3食の食事の配膳や、寝室内の美化、各部屋の寝具の準備係も各グループから担当者を数名ずつ事前に教員側で選出した。担当者の役割は、ほかの学生が快適な共同生活をするために、ある意味“奉仕”する立場にある。我々は最初これらの任にあたった学生が不平を言わずちゃんと責任を果たしてくれるか心配したが、担当者はしっかりとその責任を果たしてくれた。特に仕事が忙しかったのは食事の配膳係であったが、ほかの学生が休息している時間に食堂に集まり、教員の指示に従って黙々とかつ丁寧に配膳をおこなった。食後はテーブルを布巾できれいにふくなど、すべて施設の指示どおりに進めてくれた。また退所前には学生全員で施設全体の掃除をおこなったが、サポートしている学生も見当たらず、それぞれの持ち場をしっかりと清掃していた。アンケート調査においても、トイレ掃除をおこなったことについて、「自分たちが使ったのであるから掃除して当然である」という答えが93%を占め、「施設側がするべき」と答えた割合はわずか7%にとどまった。

合宿全体を通して、学生たちは教員の指示に従い、スケジュールどおり、施設の規則どおりに行動した。余談ではあるが、合宿に付き物の“就寝前の室内での遊び”もなく、学生たちは昼





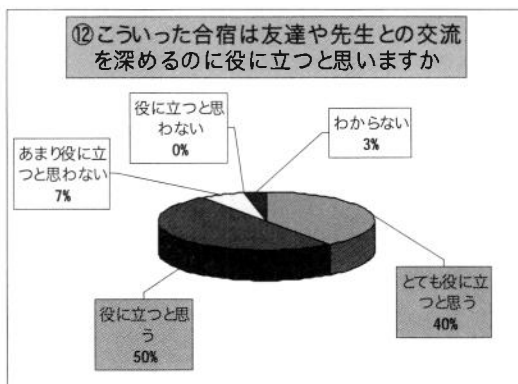
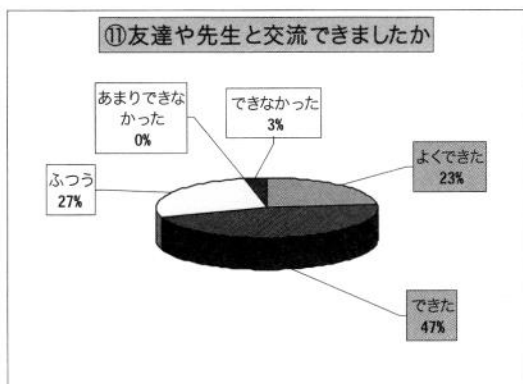
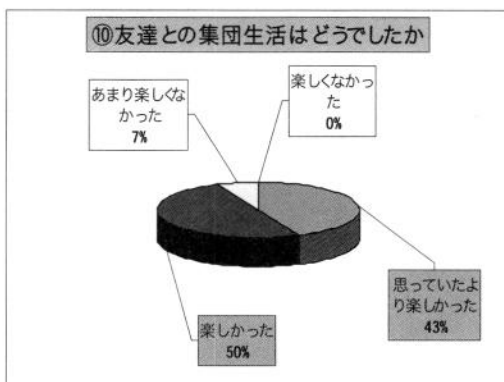
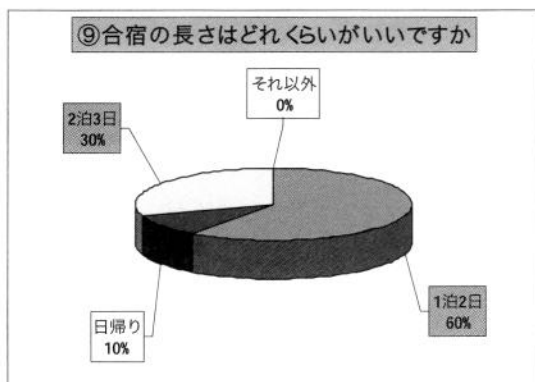
間の疲れもあってか、消灯時間が過ぎたころにはほぼ寝静まっていた。アンケート調査では、合宿全体について60%の学生が「とてもよかった」、31%の学生が「まあまあよかった」と回答し、あわせて91%の学生が満足している。

4. ま と め

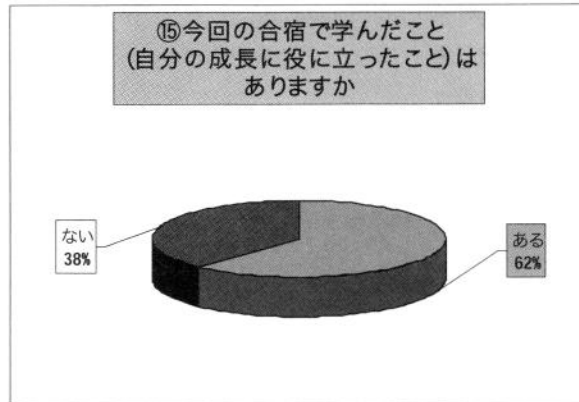
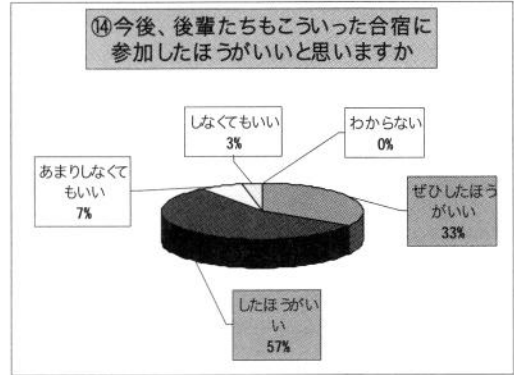
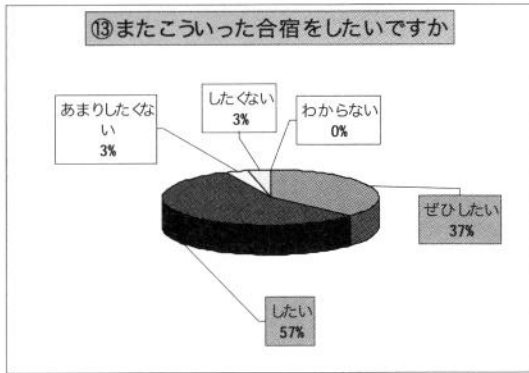
今回の合宿の全体を総括してみると、当初は教員側も手探り状態で、学生たちにも合宿の意味を十分理解してもらわないまま走り出したところがある。にもかかわらず、結果的には教員だけ

でなく、学生たちも得るものが多かったようだ。教員の立場から言えば、当初は、“協調性に欠け自分勝手な行動をとる学生がいないだろうか”、“興味を持って真剣に取り組んでくれるだろうか”、“合宿自体を無意味だととらえはしないだろうか”などと心配していた。これらの心配は今回参加した学生たちには無用の心配であった。学生は教員の指示に従い、やるべきことに対して真剣に取り組んでくれた。アンケート調査結果をみても、学生は今回の合宿を肯定的にとらえており、自主性を持ち積極的に取り組んでいたことがわかる。これは参加した教員誰もが感じたことである。

また彼ら自身が、「またこういった活動に参加したい」(94%)と感じているのみならず、「今後後輩たちもこういった活動に参加すべきだ」(90%)と答えていることから、多くの学生が合宿の必要性を感じている。合宿の長さも今回より長い「2泊3日がいい」と答えた学生が予想外にも30%もあり、学生の「もっと学びたい」という強い気持ちの現れではないかと思われる。今回の合宿が、ただ単に楽しかっただけでなく、「今回の合宿で学んだこと(自分の成長に役立ったこと)がある」と答えた学生は全体の62%であった。実際に何を学んだかは、16頁のアンケート調査の自由記述に書かれた言葉を見ていただきたい。今回の合宿を通じて、単に日本語だけでは



なく、実施目的に挙げた大切なことを学生に経験させることができると分かったことは、大きな成果であった。



⑮ 今回の合宿で学んだことはありますか (自由記述)

- ・日本語の力がついたと思う。
- ・みんなで協力すること (チームワーク) が学べた。
- ・自分の力で生活する力をつけること。
- ・チームワークの大切さ。
- ・日本語を話すとき、自分の日本語にまだまだ問題が多いこと。
- ・先生や友達と交流できたこと。
- ・日本語と友達の大切さ。
- ・先生と学生間の親睦を深められたこと、また友達とも交流を深められたことは、これからの学習生活においてもとても大きな助けとなると思う。
- ・多くの日本文化も学べた。
- ・自立の大切さ。
- ・自分自身で積極的に動けば、生活も楽しくなる。
- ・日本の風土や人情。
- ・自分で厳しく生活態度を管理すること。
- ・getting together with new friends and teacher.
- ・たくさん学んだ。自分自身で行動すること、集団生活。
- ・自分のやるべきことを自分の責任ですること。
- ・これまで学んだことのないような知識を学べた。
- ・チームワーク！



5. お わ り に

今回別科にとって初めての試みであるこのプログラムは、個別の活動内容においては改善の余地が多く、全体としても荒削りな面が残されている。学生に、自主性を持って友達と協力して行動する“喜び”を感じてもらうために、今後も今回の経験をもとにさらに研究と実践を積み、このようなプログラムを続けていきたいと考えている。

最後に、このプログラムの計画の立案から事前準備、そして合宿において学生と寝食を共にし、さまざまな面でご指導いただいた、留学生別科の吉田立先生、鈴木敦巳先生、清水勝昭先生、吉川せつ先生、そして別科のクラス担任として参加、ご協力いただいた非常勤講師の高木香与子先生、荒河由香先生、そのほかこの合宿実施にあたりご尽力いただきました各先生方に心よりお礼を申し上げます。

【資料】

2010年4月13日

留学生別科 春学期アンケート

★4月8日、9日の別科春合宿の感想を聞かせてください。

(日本語でかけないところは、中国語やタイ語でもいいです)

1. 今回の合宿全体について、どうでしたか？

- ①とてもよかった ②まあよかった ③ふつう ④あまりよくなかった ⑤よくなかった

2. それぞれの活動はどう(楽しかった、おもしろかった)でしたか？

- ①スプーン作り (a.とてもよかった b.よかった c.ふつう d.あまりよくなかった e.よくなかった)
②紙芝居 (a.とてもよかった b.よかった c.ふつう d.あまりよくなかった e.よくなかった)
③カルタ取り (a.とてもよかった b.よかった c.ふつう d.あまりよくなかった e.よくなかった)
④山登り (a.とてもよかった b.よかった c.ふつう d.あまりよくなかった e.よくなかった)
⑤カレーライス作り (a.とてもよかった b.よかった c.ふつう d.あまりよくなかった e.よくなかった)

3. どの活動が一番よかった(楽しかった、おもしろかった、またやりたい)ですか？

- ①スプーン作り ②紙芝居 ③カルタ取り ④刺エンテリング(山登り) ⑤カレーライス作り
(理由:)

4. よくなかった(楽しくなかった、おもしろくなかった、もうやりたくない)活動はありましたか？

- ①スプーン作り ②紙芝居 ③カルタ取り ④刺エンテリング(山登り) ⑤カレーライス作り
(理由:)

5. 今回の活動以外に、何かやりたいこと、やったらいいと思うことはありますか？

- ①ある ()
②ない・わからない

6. 食事の内容や量はどうでしたか？

【内容】

- ①とてもおいしかった ②まあおいしかった ③ふつう ④あまりおいしくなかった
⑤おいしくなかった (食べられなかった料理:)

【量】

- ①多かった ②ちょうどよかった ③すくなかった (昼 夜 朝 カレー)

7. 夜食(パン、ジュース)はどうでしたか?

- ①あってよかった ②なくてもよかった
③もっと他の物がよかった(例:)

8. 自分たちで部屋やトイレなどのそうじをしましたが、どう思いましたか?

- ①自分たちが使ったのでそうじをして当然 ②そうじは施設の人たちがするべき
(そうじについて思ったこと:)

9. 合宿の時間、長さ(今回は2日間(1泊2日))はどれくらいがいいですか?

- ①2日間(1泊2日)がいい ②1日間(日帰り) ③3日間(2泊3日) ④それ以外()

10. 友達との集団生活はどうでしたか?

- ①思っていたよりも楽しかった ②楽しかった ③あまり楽しくなかった ④楽しくなかった
た (その他:)

11. 友達や先生たちと交流できましたか?

- ①よくできた ②できた ③ふつう ④あまりできなかった ⑤できなかった
(理由:)

12. こういった合宿は友達や先生との交流を深めるのに役に立つと思いますか?

- ①とても役に立つと思う ②役に立つと思う ③あまり役に立つと思わない ④役に立つと思わない ⑤わからない

13. またこういった合宿をしたいですか?

- ①ぜひしたい ②したい ③あまりしたくない ④したくない ⑤わからない

14. 今後、後輩たちもこういった合宿に参加したほうがいいと思いますか?

- ①ぜひしたほうがいい ②したほうがいい ③あまりしなくてもいい ④しなくてもいい ⑤わからない

15. 今回の合宿で学んだこと(自分の成長に役にたったこと)はありますか?

- ① ある
(具体的にあれば書いてください:)
②ない

以 上